



三位一体と教会の生命

〔水曜日の一般謁見でのお話。〕

1 神との愛の一致を実現するために巡礼を続ける教会は、「御父と御子と聖霊の一致に基づいて一つに集められる民」のようです。聖チプリアヌスの素晴らしい言葉は(「主の祈りについて」23、「教会憲章」4参照)、三位一体の神の現存によって救いの共同体となった教会の神秘に私たちを近づけてくれます。旧約の神の民のように、神の絶え間ない現存の象徴である昼間の雲柱と夜の火柱に守られて、教会は新しい出エジプトに導かれます。このような展望をもとに、教会を一、聖、公、使徒継承とする三位一体の栄光を黙想してみましょう。

2 まず第一に、教会は一つです。洗礼を受けた者は本当にキリストと一致し聖霊の力によって神秘体を構成することになります。第二バチカン公会議は次のように述べています。「この秘義の最高の範型および源泉は三つの位格における唯一の神、『父と、子と、聖霊』の単一性である。」(「エキュメニズムに関する教令」2) 昔は多くの分裂によって、この一致は苦しい試練を経験してきましたが、教会の尽きることのない三位一体の源は、もっと深い交わり、一致を生きるよう教会を駆り立てます。エルサレムでの最初の共同体の中での交わりはまばゆいばかりのものでした。(使徒言行録2・42、4・32)

神が聖別した教会

教会一致のため(エキュメニズム)の対話は、三位一体を一致の源と考えることによって光を得ることができます。キリスト者は皆、三位一体が一致の基礎であることを知っているからです。私たちが強調するのは、「交わりは神がお与えになったものであり、三位一体の特徴を持つということです。出発点は洗礼であり、聖霊においてキリストを通し、信仰によって三位一体との交わりが始まります。聖霊によって与えられるのは、この一致を支えるのが、みことばや秘義、秘跡やカリスマだからです。」

(Perspectives on Koinonia, Report from the third quinquennium, 1985-89, of the Catholic-

Pentecostal dialogue, n.31) このことと関連して公会議が全キリスト者に次のことを思い起こさせます。「父とみことばと聖霊との交わりに、より密接に結ばれば、より容易に相互の兄弟愛を深めることができる。」(「エキュメニズムに関する教令」7)

3 また教会は聖なるものです。聖書の言葉によると、信者の道徳的実存的な聖性が語られる前から、「聖なる」という概念は、神に選ばれた民とその民に与えられる恩恵を示していました。それはまた、神によって定められた神聖さという意味にも当てはまります。ゆえに、真理のうちに、信者(ヨハネ)の共同体を「聖化」するのは神の現存なのです。(ヨハネ17・17、19) 神の現存の最も崇高なしるしは典礼です。それは、神の民の聖化の現われなのです。典礼の中には、主の御体と御血が現存なさる聖体祭儀があります。それだけでなく、「『礼拝は、十字架の死に至るまで犠牲となったこの愛に報いようとする応答、つまり、私たちの感謝であり、ご自分の死によって私たちがあがかない、その復活によって私たちが永遠の生命に与るものとしてくださったことに対する賛美であります。それで、父と子と聖霊に向けられるこのような礼拝は何よりもまず聖体の典礼の挙式によって行なわれます。しかし、それは教会と教会の生命をみたすべきものです。』」(「聖体の秘義と礼拝について」3) また、公会議は次のことを伝えています。まさに、「相互愛と至聖三位一体に対する唯一の賛美において交わるとき、教会の本質的使命に答え、完成された栄光の典礼をあらかじめ味わい、それにあずかる。」(「教会憲章」51)

4 教会はカトリック(普遍的)です。教会はキリストを伝えるため全世界に遣わされています。全ての指導者がアブラハムの神に属する人々と集うことを願っているのです。(詩篇47・9、マタイ28・19参照) 第二バチカン公会議は次のように述べています。「旅する教会は、その性質上、宣教者である。なぜなら教会は、父なる神の計画による子の派遣と

にその起源をもっているからである。この計画は『愛の泉』、すなわち父なる神の慈愛から湧出する。父は、初めなき初めであり、そこから子が生まれ、聖霊が子を通して発出する。父は、その無限の慈愛と、あわれみとによって、みずから望んでわれわれを造り、そのうえ、われわれを自分の生命と栄光とに参加させようとやさしく招きつつ、神の善を惜しみなく注ぎ、また今後も注ぐことをやめない。こうして万物の造り主が、自分の栄光と同時にわれわれの幸福をも配慮しつつ、ついに『すべてにおいてすべてとなる』（1コリント15・28）。」（「教会の宣教活動に関する教令」2）

5 最後に、教会は使徒承伝（継承）です。使徒たちはキリストの命令に従って国々へ行き、全ての民を弟子にし、父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、主のお命じになったことをすべて守るよう教えました。（マタイ28・19～20参照）この使命は教会全体に与えられました。教会はみことばを通して、聖霊と秘跡により、生きるもの、輝くもの、効果的な働きのできるものとなります。こうして教会は「神の計画を完成させる。この計画をキリストは自分を派遣した父の栄光のために従順に愛情を込めて果たし

たが、それは、全人類が一つの民を形成し、キリストの一つの体に結集し、聖霊の神殿にされるためである。」（「教会の宣教活動に関する教令」7）

一、聖、公、使徒継承の教会は、神の民であり、キリストの体であり、聖霊の神殿でもあります。聖書から出ているこの三つのイメージは、教会の三位一体の側面を示しています。この側面（三位一体）のうちに全てのキリストの弟子、つまり三位一体とより深く真剣に交わりながら生きるよう呼ばれた人々が見い出されます。教会一致運動の確固たる基盤は三位一体の神にあります。というのも聖霊は、「信じる者を救いに関するあらゆるたまもの仲介者キリストに結び付け、またご自分を通して信者を御父に近づかせ、同じ聖霊において、『アッバ、父よ』と呼びかけることができるようにして下さる」からです。（Lutheran-Roman Catholic Joint Commission, Church and Justification, n.64）そして私たちは教会において、荘厳に現われる三位一体の栄光を見つけ出します。ですから聖アンブロジーオが届ける招きを受け入れましょう。「起きよ、深い眠りにある者。起きて教会に急げ。御父と御子、聖霊のいる教会へ。」（ルカ福音注解放書7）

(2000.6.14)

神の掟は人間の心に刻まれている

〔水曜日の一般謁見で、エジプト巡礼を振り返って。〕

(…)

掟に従わず神への信仰は保てない

1 (…)

十戒は、唯一の確かな人間の未来を明らかにしますが、それは十戒が横暴で君主のような神の独断的な押しつけではないからです。ヤーウエは石に十戒を刻み込みましたが、何よりもまず、どんな時でも場所でも有効で受け入れられる普遍的な道徳律として、すべての人々の心に刻み込みました。この掟は、利己主義、憎しみ、偽り、軽蔑を禁止しますが、それはこれらのことが人間のペルソナを破壊するからです。絶えず神の契約を思い出させることによって、十戒は主こそ私たちの唯一の神であることを強調します。また、他のいかなる神も偽りで、それは最終的に人類を奴隷とし、人間としての尊厳を墮落させるものであることも強調します。

「聞け、イスラエルよ。…あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え…なさい。」（申命記6・4～7）これらの言葉は、敬虔なユダヤ人が日々繰り返しているものですが、すべてのキリスト者の

心にも響き渡ります。「聞け。わたしが命じるこれらの言葉を心に留めなさい。」神の掟を守らなければ、神に忠実であろうなどと考えることはできません。さらに、神に忠実であることは、自分自身とその本性に、また最も深い抑えられない熱望に忠実であることでもあります。

2 ダミアヌス大司教と温かく迎えてくださった修道士の皆さんに感謝しています。大司教は、修道院の入り口で待っていてくださり、修道院に保管されている貴重な聖書に関わる「聖遺物」についてお話ししてくださいました。聖遺物エテロの泉と、特に「燃えるやぶ」の根の前にひざまづき、神が「わたしはあるものである。」と言ってその存在をモーセに伝えた言葉を思い起こしました。もう一つ感心したのは、何世紀もの間に修道士の皆さんの祈りと黙想によって生み出されてきた素晴らしい芸術作品でした。

聖書朗読の前にダミアヌス大司教は、ホレブ山がシナイ山の頂上と共に私たちの上に乗っすぐそびえたたっていることを思い出させてくださいました。十の言葉（十戒）の頂上は、神が「炎と闇の中で」モーセにお話しかけになった場所です。何世紀もの間こういった

環境の中で、修道者の共同体は、「絶え間ない自然の黙想と感覚のコントロール」によって、キリスト教完徳の模範的姿を追い求めてきました。そして、靈的対話と修徳の生活をおくるために伝統的な方法を用いてきました。大司教は会見が終わると、私を空港に送るために親切にも数名の修道士を同行させてくださいました。

3 この機会を使って、ムバラク大統領にもう一度感謝の意を表したいと思います。またエジプト当局やこの旅行を実現させてくださった全ての人々にも感謝したいと思います。エジプトは最古の文明の発祥の地です。キリスト教の信仰が使徒たちの時代にもたらされましたが、中でもペトロとパウロの弟子であり、アレクサンドリア教会の創立者であるマルコの貢献が目立っています。(…)

小規模でありながら熱く燃えるようなエジプトのカトリック共同体には再びあいさつの言葉を送りました。カトリック教徒の皆さんには、カイロで荘厳に行なわれたごミサでお会いしました。そこにはエジプトの全カトリック教会が参加し、コプト、ラテン、マロナイト、ギリシア、アルメニア、シリア、カルデアの教会も参加していました。主の食卓に集まり、同じ信仰を祝って、生命への熱意とエジプトの兄弟姉妹の使徒職を神に委ねました。エジプトの兄弟姉妹の多くの犠牲と寛大さは、聖家族が二千年前ヘロデから逃れてやって来た場所で、福音への忠実さを証ししています。

山上の説教は十戒の完成

エジプトでのカトリック以外の教会とその他の教会共同体の代表者や信者との出会いは、素晴らしい思い出として心に抱き続けています。二十世紀に聖霊の恩恵によって前進した教会の一致がますます発展し、主イエスが熱烈に祈られた完全な一致へさらに近づくことができますように。

4 シナイ山は今日、もう一つの山を思い出させてくれます。それは神のお恵みによって、ガリラヤにある至福についての説教が行なわれた山です。山上の説教の中でイエスは、律法を廃止するためではなく完成するために来たとおっしゃいました。(マタイ5・17参照) 実際、神のみことばが人となり、十字架上で死去して以来、十戒はイエスの声を通して広められました。神は十戒の掟を、恩恵に満ちた新しい生命を通して、キリストを信じる人々の心に植えつけられました。ゆえに、イエスの弟子たちは多くの掟に圧迫を感じるのではなく、愛の力によってかりたてられ、神の十戒を自由の掟と見なすのです。聖霊の内的な働きを通して愛するという自由です。

至福の教えはシナイの掟が福音において完成されたものです。ヘブライ人との契約が、キリストの御血による新しい永遠の契約の中で完成することがわかるのです。キリストは新しい掟であり、救いが全世界にもたらされたのはキリストにおいてです。

(…)

(2000.3.1)

創造主に心を開く

〔学問の様々な分野で活躍する人々が各国から集まり大聖年を祝った。教皇様は文化や学問の分野でキリストの忠実な証人になるよう求められた。〕

1 大聖年の巡礼にやって来た皆さんをお迎えしていることを心から喜んでいきます。(…)

数世紀の間、科学は素晴らしい発見を遂げており、最も有力な位置を占め、時には真理に対する唯一の基準、幸福への唯一の道だと思われることもありました。科学的要素だけに基づいた考え方は、私たちが疑いの文化に慣れさせようとししました。神の存在について考えることを拒否したり、人間をその起源や死の神秘の中で眺めることを拒んだりもしました。あたかもそのような見方が科学そのものを問題視することになると考えたのでしょうか。科学は時々、神を単なる精神的な構成物で科学の知識が受け入れられないもののように見なしました。このような考え方は、科学を人間から離れさせ、人間のた

めに貢献することも難しくしました。

(…)

2 (….) 科学者は造られた秩序を前にして、驚異と尊敬の念にかられ、万物の造り主の愛に引き寄せられるのを感じます。信仰は、どんな研究をも自らのうちに組み入れ、吸収することができます。というのも、いかなる研究も造られたものの特性についてのより深い理解を通して、創造主や万物の源と目的を発見する可能性を与えてくれるからです。「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現われており、これを通して神を知ることができます。」(ローマ1・20)(…)

3 教会は科学技術の研究を高く評価しています。なぜなら科学技術の研究は、「人間による被造物の支配を表わす重要なもの」(「カトリック教会のカテ

キズム」2293)であり、また、真・善・美に仕えるものでもあるからです。(・・・)さらに言えることは、広大なものや微小なものを探求することで、学術研究は、宇宙の全体のあらゆるところに映し出されている神の栄光を明らかにするということです。

神は私たちに真理を知る望みを与えられた

信仰は理性を恐れません。信仰と理性は、「人間の霊魂が真理を深く考えるよう導く両翼のようなものです。神は人間の心に、真理を知る望み、つまり神ご自身を知る望みを植えつけられました。それは、神を知り愛することによって、人間が自らについての完全な真理へ行き着くためでもあります。」

(「信仰と理性」序文) 過去に、信仰と理性の分裂が人間にとって悲劇となり、私たちがますます断片的な知識の脅威にさらされ、内的一致を失うことがありました。今日の皆さんの使命は「聡明な人にとって、全てのものは調和し一致している。」(パラマスのグレゴリウス「テオファネス」)という信念に基づいて研究を続けることです。

そして、聖霊の賜物を乞い願うようお勧めします。真理を愛することは聖霊において生きることだからです。(聖アウグスチヌス「説教」267,4参照) 聖霊は、私たちが神に近づき、大声で「アッバ、父よ」と神を呼び求めることができるよう働き掛けてくれます。たとえ皆さんが、神が私たちの眼前に置かれたものに没頭し、厳密な分析を行なっているとしても、何ものも「父よ」と神を呼び求めることを妨げることがありませんように。

4 学問の分野で活躍する皆さん、皆さんに求められている責任は大きなものです。個人の善のため、全ての人々の善に仕えるために働くよう求められているのです。同時に、常に全ての人間の尊厳と被造物への敬いに関して敏感でなければなりません。どんな科学的研究にとっても必要なことは、倫理的な基盤と人々が必要とするものを尊重する文化に対して心を開くことです。これは作家ジャン・ギトンがその科学研究の中ではっきりと強調していることです。霊的な側面を知的なものから決して切り離すべきではないということを言っています。(「『知的な仕事』研究者と作家への勧め」参照) このことから、もう一つギトンが思い起こさせてくれることは、科学技術は、人間の内面についての価値を考慮に入れることが不可欠であるということです。

研究と発展の先端にいる皆さんを信頼していません。絶え間なく地上の神秘を探求し、信仰によって明らかにされる地平線に皆さんの心に向けましょう。知識と信仰の人として、基本的な原理と皆さんの旅路にしっかりといかりを降ろせば、キリストや教会から遠く離れた人々とも役に立つ建設的な対話が実現することでしょう。ですから、まず第一に目に見えない神を熱心に求める人になってください。神だけが、生命の深い望みを満たし、皆さんを恩恵で満たしてくださる御方です。

全人類のための希望を築く人

5 学問に従事する皆さん、キリストへの忠誠を証しする人となる望みをもって行動してください。三千年期の幕開けに、豊かな現代文化は、哲学と神学、そして科学と信仰との間の対話についても空前の展望を与えてくれています。全精力を捧げて、文化や科学の研究を発展させてください。その発展によって神の神的な存在と仲介が常に明らかにされることでしょう。このことに関連して、今回、学問に従事する人々が大聖年を祝ったことは、本気で真理を求める人々にとって励みとなり支えとなります。今回の大聖年の祝いは、いかなる知的分野においても厳密な研究者となり、同時に福音の忠実な弟子となることを示しています。大変な科学的研究に日々自己を捧げている多くの人々に呼びかけ、ここでその人々の霊的な献身を呼び起こさずにいられるのでしょうか。ここにいる皆さんを通して、そのような人々一人一人にあいさつし、心からの励ましを送りたいと思います。

学問に従事する皆さん、全人類のために希望の建設者となってください。神が皆さんに付き添い、人間の本物の進歩に役立つ皆さんの努力に実りがもたらされますように。上智の座であるマリアが皆さんをお守りくださいますように。聖トマス・アキナスとその他様々な学問の分野に関わる聖人たちが皆さんを取りなしてくださいますように。聖人たちは、神的な神秘の光の中で、被造物に対するより深い知識に著しい貢献を果たしました。

私も絶えず心を配り心からの友として皆さんのそばにいます。毎日祈りの中で皆さんを思い出していることを保証します。そして、心から皆さんに祝福を贈り、また皆さんの家族と、様々な形で誠実に絶え間なく人類の科学的発展に貢献する人々にも祝福を贈ります。(2000.5.25)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は火・木曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00となっています。

「80歳の教皇」

〔ルイジ・アッカトリのホワキン・ナバッコ・バリエス(バチカン報道官)へのインタビュー〕

2000年5月18日、「コリエレ・デラ・セラ紙」]

—八十歳になられるパパ様の並はずれた行動力には驚くばかりです。シナイ山、聖地への巡礼、赦しと殉教の週間、ファチマでの列福式と、三ヵ月間世界中の注目を集め、評論家たちは、判断を改め予想を見直さなければならぬと思っています。ところでこれらは教皇様の最後の仕事なのでしょうか。

「いいえ、全く違います。評価の間違いに過ぎません。それは最新の出来事だけを重要視した結果です。たしかに最近密度の濃い出来事が相次ぎました。それは人々を当惑させると同時に、以前にもこのような非常に密度の濃い時代があったことをぼやけさせてしまいます。事実、教皇様はずっと、福音の証人として自由に進んで信仰の要求することに応えるため並はずれた努力をしてこられました。」

—病気でなければ八十歳には見えないでしょう。しかし一方、体の震えがあっても骨惜しみなさることがありません。戦いの場で、つまり仕事に倒れたいと思っていられませんかと言っている人がいますが…。

「ご自分のことを忘れ、もはやご自分のことなど眼中にないような印象を受けています。将来の計画をたてることは、今を生きることだとお考えなのです。この観点からすると、毎日が、今を築き上げるかけがえない使命をもつことになります。未来は開かれており、神の聖旨に任されていることを明らかに納得しておられるのです。高齢者への手紙にお書きになったように、〈生きる喜び〉を持ち続けておられますが、それには皮肉っぽい意味もあります。聖地からお帰りになったとき、ある新聞記者が、まだご覧になっていないことは何ですか、とお尋ねすると教皇様は、『最後の審判』とお答えになりました。」

—教皇様のイニシアティブは止まることはありません。しかし矛盾していることもあるように思えます。過ちを詫びることでは前進しているように思えますが、殉教者の日のことは教会の聖性を再確認しようと立ち止まれ、ファチマでのことでは、後戻りしたような感じがするのですが。

「この教皇様は多くの土地を旅されましたが、歴史を、特にキリスト教の、カトリックの歴史をも探訪されました。そしてそこで、偉大な聖性のしるしと同時に不面目な事をも見いだされたのです。カトリック教徒によってなされた恥ずべき行為を考察されて赦しを乞い求める赦しの日が生まれ、聖性、特に信仰のために死をも辞さなかった人々のことに思いを馳せて殉教者の日が生まれたのです。矛盾など全くありません。」

—ファチマは、カトリックの伝統主義、反共産主義のキー・ポイント的な存在でしたが、同時にエキュメニズムに反する面もありました。〈第三の秘密〉を公表することはこの反エキュメニズムの伝統主義を助長することになりませんか。

「〈第三の秘密〉の公表は、反エキュメニズム的な伝統主義にいかなる支持も与えることにはなりません。彼らは、事実ではない千年至福説的な推測を思い巡らして、未だ発表されていないファチマのメッセージを曲解しているのです。それを発表することは、ファチマがある一派に牛耳られることはないことを証しすることになるでしょう。」

—あなたは、ヨハネ・パウロ二世と報道の世界との仲介者です。報道の世界は教皇様を理解しているでしょうか。

「ヨーロッパ、アメリカと言わず世界中で報道の世界は、教皇様の魅力の虜になっているようです。それは、教皇様がもっとも本質的な教えを多くの人に分かりやすくお教えになっているからです。最近の出来事では、嘆きの壁に残して来られたユダヤ人にゆるしを乞う祈りがあります。」

他にも多くのことがあります。刑務所にアリを訪ねられたことや危篤状態のアルメリア大主教訪問などです。いつでも、言葉や態度の意味を理解しない人がいるのは当然です。しかし歳月を経るにつれて理解する人は増えています。」

「世界の教皇」

〔2000年5月18日付けの「レブプリカ紙」、マルコ・ポリッティのフランツ・ケーニツヒ枢機卿との会見〕

「今の教皇様は世界の教皇様です。公会議の流れでカトリック教会は世界的な視野を与えられ、ヨハネ・パウロ二世は全世界的な規模の最初の教皇になりました。」

三十年前には多くのカトリック信者にとって無意識のうちに教会はヨーロッパのもの、バチカンはイタリアのものであった。ヨハネ・パウロ二世はその意識を変えた。(…)ヨハネ・パウロ二世に際立っていることは、何よりも人類と世界に向かって積極的に開かれておられる点だと、ケーニツヒ枢機卿は強調する。

「最初の回勅で教会の道は人間であると宣言されました。最初から、身体的なことも含めて人間への関心をお示しになったのです。人々との最初で直接の出会いは大群衆とのものだったことを思い出します。またその多くの旅行が証明しています。教皇様は、バチカンに閉じこもらず、世界に出て行かれま。教皇様は、多くの言語を話し、同じメッセージ

を送ろうと努め、地球上の全ての人と話したいとお望みです。

以前、教会は人権に関して恐れを抱いていました。(…)ヨハネ・パウロ二世は、人々の間に一致点を求めようとなさいます。私たちの様々な言語、文化、宗教を越えて、全ての人には共通の人権があります。それゆえ、教皇様は次のように強調されるのです。『私たちは平和と人間の尊厳を守るために一緒に働かなければなりません。』このため、1986年、アシジであらゆる宗教の指導者たちとの集まりを主宰されました。バチカン当局は心配したものです。教皇様は何をなさるのか。様々な宗教を混合する諸教混交の危険はないのだろうか、と。しかし教皇様は、宗教が時には政治や民族主義の悪い影響を受けていることがあるにしても、平和と民族間の理解を求めて共に活動すべきだと固く信じておられます。」

「教皇様は辞任 なさらない」

[2000年5月19日、「レプブリカ紙」、
オライオ・ラ・ロッカのラツィンガー枢機卿
へのインタビュー]

—ご健康上のことで、教皇様は辞任なさると考えられますか。

「絶対にそういうことは考えられません。何か考えられしきことも考えられません。いずれにしろ、今、教皇様は全く考えておいでにならないでしょう。この聖年にしておられることを考えるだけで十分です。ほとんどあらゆる儀式に出席しておられます。その行動力、様々なイニシアティブとご旅行を考えてください。この聖年に示された牧者としてのあらゆる振る舞いやイニシアティブはその身体的な弱さの中で表明されましたが、それによって教皇様の偉大さと教会における霊的人間的な教皇様の存在がはっきりしました。」

—あなたは、ファチマの第三の秘密を全部公表するために働いておられますね。

「できるだけ早く、資料の注釈と歴史的な枠組みと共に公表したいと思っています。作業はうまくいっています。文書として六月前半かそれより少し後に第三の秘密の全貌が発表されるでしょう。この私的な啓示に望外な期待を寄せるべきではないからです。たとえば、祈りやキリスト信者としての生活に役立つことがあるにしても、一キリスト信者にとって本質的なものではありません。」

—それでは、ファチマの第三の秘密は、先の二つと、また他の歴史的なマリアの出現と合わせて、信

仰の教義ではないのですか。

「出現に関することは何も信仰の教義ではありません。」

(この第三の秘密はすでに公表されてます。)

バチカンからの ニュース

「教皇様の遠足」

ヨハネ・パウロ二世教皇様は、すばらしい一日をお過ごしになった。強い風が吹いていたが、後に太陽が現われた。十日から二十二日までの休暇の間の一日。

教皇様は朝から車でローマを立ち、イタリア側アルプスに出かけられた。途中、協力者や同伴する友人たちと共にキャンプで食事、後、二時間ほど散歩なさった。最初は雪が降り、ついで雹と、稀にみる変化にとんだ一日であったが、誰も予想しなかったところに太陽が顔を出した。宿泊先にお戻りになると、道で待っている人々に挨拶なさった。車で戻る途中、イントロッドという町で二度車を止めて、一人ひとりにお話しかけになった。四十人ばかりの人がいた。特に幼い子供たちを抱きしめて接吻を浴びせ、子供の親たちは大満足だった。

土地の人たちは遠慮がちな性格である上に、教皇様には休息が必要ということをよく知っていたので、邪魔をしないよう心がけていたが、教皇様はあちこちで立ち止まり、お話かけになるので、皆はこのときとばかり、言葉と動作で愛情をいっぱいに表していた。(バチカン7.13)

「バシリカでの告解数倍増」

大聖年が始まっておよそ六ヶ月たった時点で、ローマの各大聖堂での告解数が倍増した。

大聖堂では修道会の司祭が中心となって告解を聴いているが、大聖年中は時間を延期し食事のためのわずかの時間を除いて十二時間の告解時間がある。ラテラノ大聖堂では十八人のフランシスコ会聴罪司祭がスペイン語、英語、イタリア語、フランス語、ポルトガル語、ポーランド語、ドイツ語、クロアチア語、ギリシア語の告解を聴いている。

聴罪司祭の世話役によると、通常は月に七千人が告解するが、大聖年中は月に一万四千人に倍増したとのこと。(バチカン7.13)